

〈研究ノート〉

旅人の物語と反復される「故郷喪失者」のイメージ — パラレルワールドの「スペイン人」に関する二つの事例 —

古 畑 正 富

要 旨

This paper explains the interesting image of “people of homelessness”, who are to lead to “vagabonds losing homeland and wandering various countries” in historical terms. According to the later thought of Martin Heidegger, for example, we understand that they are repeatedly given in the context of traveler’s narrative, reminding us of the famous literary work *El ingenioso hidalgo Don Quijote de La Mancha* written by Miguel de Cervantes. In order to take a bird’s eye view of such situation, therefore, we offer two other cases relating to it: a) Hadrian, the Roman emperor; b) Doña Francisca Pizarro, the daughter of Francisco Pizarro (conquistador) and Doña Inés Huaylas (Inca princess). It is striking that both persons just shed new light on the hitherto unknown “Spaniards” existing in parallel world.

Marguerite Yourcenar attempts to create the memories of Hadrian in her historical novel, and skillfully characterizes the ups and downs of his life by polyphonic means. In this depiction, we can see that his itineracy, far away from home, brought great hardship to himself. Indeed, *Historia Augusta* tells us that Hadrian, ill in bed and looking death in the face, made an introspective poem filled with melancholic feelings. However, we assume here that more importance should be attached to his courage to experience the thrilling parallel world, blended in moment and eternity as a result of mirror effect, rather than his mental weakness.

Portraying a time of Peruvian dramatic change in the Spanish colonial days of the 16th century, the biographical study by María Rostworowski describes Doña Francisca Pizarro as a mestiza who did not have any opportunities to return to homeland (Peru), but could cope with the transformation of the path of her life in Spain. From this angle, she is sharply contrasted with a mestizo, Garcilaso de la Vega, el Inca. As suggested in the finale of Franz Kafka, *Metamorphosis*, the relationship between the two appears to indicate the parallel world, composed of man (hidalgo) and woman (hidalga). Even if man is connected with woman under the influence of dialectical family system, his fate does not always rank alongside her circumstances. Because man keeps heavier fretfulness in ego than woman.

Now that all things transmigrate, naturally enough, we are obliged to live on the stage of “people of homelessness”. This is equal to the above two cases on Hadrian and Doña Francisca Pizarro. Yet, at the same time, we must step forward in search of the continuity between private (*terminus a quo*) and public (*terminus ad quem*) histories. By so doing, we shall be able to approach the essential meaning of human being and place it in the current of the times.

キーワード：旅人，故郷喪失者，パラレルワールド，ハドリアヌス，
ドニーヤ・フランシスカ・ピサロ

I. はじめに

どこか唐突な印象を与えるかもしれないが、パラレルワールド（並行世界）というSF的結構を得手とする村上春樹氏の初期作品のなかから、いまを生きる我々にとって至極含蓄に富む言い回しを紹介しよう。「しかしもう一度私が私の人生をやりなおせるとしても、私はやはり同じような人生を辿るだろうという気がした。何故ならそれが—その失いつづける人生が—私自身だからだ。私には私自身になる以外に道はないのだ。どれだけ人々が私を見捨て、どれだけ私が見捨て、様々な美しい感情やすぐれた資質や夢が消滅し制限されていったとしても、私は私自身以外の何ものかになることはできないのだ。……」¹⁾。ここに刻まれた旅人の物語と反復される「故郷喪失者」のイメージは、チリの作家ロベルト・ボラーニョ（1953-2003年）も短篇集でその輪郭をうまく描写し、我々はそこから「アナロジーの糸」と称すべき概念装置をつかみ出すことができる²⁾。

上記の観点に基づき、本稿は、外的冒険および内的彷徨がパラレルワールドとして組み込まれている、興味深い男女の事例を取り上げたい。一般的レベルでは、ローマ皇帝ハドリアヌス（第II節）も、征服者ピサロの娘ドーニャ・フランシスカ・ピサロ（第III節）も、我々にとって知られざる「スペイン人」に他ならない。だが、この場合、「スペイン人」は人種的指標ではなく、アウトブリードの要素も点描される複雑な歴史空間、つまり一種の「世界史」が展開したと認識すべきだろう。したがって、本稿の目的は、まるで粒子のように小さな物語「個人史」が転移し、それを胚胎にいつしか大きな物語が残される条件を予備的に考察することである（第IV節）³⁾。

II. ローマ皇帝ハドリアヌスと「スペイン人」の旅人の物語

片倉充造氏によれば、ガブリエル・ガルシア・マルケスは現実の詩的な転移を標榜し、フェルナンド・ボテロが指摘するとおり、彼独自の文体で現実を彫琢し、凶像に置き換えながら言葉の肉付けを図った⁴⁾。これは、マリオ・バルガス・リョサを含む一群の作家たちの創作論、彼らが披瀝する「ラテンアメリカ性」の底流となり、本来の物語形式の復権を力強く主張するものであった⁵⁾。そして、“双頭の鷲”に喩えられる「歴史 ≡ 物語 (historia)」という古典的方法を引き合いに出すまでもなく、その中核に私小説を含む「個人史」のもつ豊潤な魔力、時おり甘美な憂鬱や陶酔感へと誘う効果が存在したことは、端倪すべからざるところである⁶⁾。

この問題に関して、本節では、ローマ皇帝ハドリアヌス（在位117-138年）の心性へ踏み込んだ、マルグリット・ユルスナール（1903-1987年）の歴史小説を読んでみよう⁷⁾。まず、同書のフランス語の表題に、「記憶（メモワール）」の複数形が用いられることは注目に値する。ここでユルスナールが志向したのは、あまりに硬直し類型化された英雄伝の壁を開放し、単なる支配者の凍てついた「記念柱」を脈打たせ、生前の業績と資質を有機的に復元する作業のため、浮き沈みの激しい個人としての生涯を一小さくとも多様な流れを集めた大河のごとく一彼の内面から迸る〈声〉を介して伝えることであったと推察される。それは（一人称による書簡体の）「回想」という形で他者と生々しく交錯し、ついには奇妙なくらい走馬灯の様相に似てくる⁸⁾。もちろん、ユルスナールはハドリアヌスに関する史料、ラテン語皇帝伝記集『ヒストリア・アウグスタ』所収の「ハドリアヌスの生涯」などに依拠する⁹⁾。しかし、覚え書き¹⁰⁾に照らしてみれば、焦燥を重々しく蔵

したハドリアヌスにより、ユルスナールが大いに表現の場を得て、両者を結んでいる見えざる紐帯を映し出したことは間違いない。

さて、現世を謳歌したハドリアヌスでさえ、ローマ帝国の領域を防衛し、その一円支配を固めるべく長年の巡察をへた結果、病に侵されて己の終焉が観えたとき、瀕死の床で内省的な詩を腐心しつつ作ったと考えられる¹¹⁾。

さまよえる、いとおしき魂よ
 汝が客なりしわが肉体の伴侶よ
 汝はいまこそ辿り着かんとする
 青ざめ、こわばり、露わなるあの場所に
 昔日の戯れも もはやかなわで…… (多田智満子訳)

安井蒨氏はいみじくも、「元首政期のローマ人は自らに対する死後の記憶の保存に、なみなみなならぬ関心を示した。前一世紀以降における数多くの碑文や記念物の建立は、そうした関心のあり様を反映している」と述べるが、空虚と孤独が心を噛むハドリアヌスも、永続的に記憶されたいと切実に希求し、生存への渴望と表裏一体になった気持を吐露していることは興味深い¹²⁾。ハドリアヌスの性格の複雑さは古代から頻りに囁かれた評判であるが、何人も産衣に包まれた時点から気まぐれな感情の持ち主だったわけではなかろう¹³⁾。政治史の立場でハドリアヌスに対する優れた理解を示した南川高志氏は、あえて彼を「運の悪い皇帝」と呼ぶ一南川氏によれば、非力であった即位当初には不透明な養子縁組と四元老院議員処刑事件で疑惑と憎悪を招き、爾来、権力者としての負の思い出に晩年に至るまで苦しみ、彼のギリシア好みも、やはりギリシア好みであった暴君ネロ（在位 37-68 年）を元老院議員たちに想像させたという¹⁴⁾。それゆえ、ハドリアヌスが〈ローマ〉という故郷（ドイツ語の女性名詞ハイマート、スペイン語では casa = tierra natal）に対し、ただならぬ喪失感を抱いたとしても不思議ではない。

要するに、各地を転々としたハドリアヌスの生涯はあくまで波瀾に満ち、迫りくる起伏の連続であった。単純過去→複合過去→単純過去と推移するハドリアヌスの旅は、外的冒険と内的彷徨が入り混じるが、その軌跡に小さくとも多様な意味を付着させ、しかも自らのうちに吸収して重層化した。にもかかわらず、「私的な人生」の最後には始原の単純さへ戻り、「公的な記憶としてのもの」に変わっていく運命を凝視せざるを得ない。彼の複雑な振舞いには、そうした心理的葛藤が陰に陽に働いたと思うべきである。

ハドリアヌスは、ヒスパニアにおける属州バエティカの町、イタリカ出身と記録されている¹⁵⁾。「スペイン人」の歴史叙述がいつどこから開始されるかは、非常に難しい問題である。しかし、ヨーロッパの異端児にふさわしい「スペイン性」に瞠目すれば、スペインのカトリック帝国の遙かな前史を飾る群像として、ハドリアヌスの性格は例外的というより典型的なものだろう¹⁶⁾。司馬遼太郎氏はエッセイのなかで「スペイン的激情」に触れ、「スペインですばらしいと思ったのは、どの顔も一男女とも一張りがあって、頑質なほどに自信にみちていることだった」と語るが、この心性はハドリアヌスの理想主義にも共有されるのではないか¹⁷⁾。

たとえば、ミゲル・デ・セルバンテス『ドン・キホーテ』は、遍歴の騎士／郷士 (hidalgo) たる旅人を描く壮大な物語として有名である¹⁸⁾。この作品において、主人公が収穫したものは何か。

細かな読解を試みると、ドン・キホーテが手にした物質的な利益はなく、ひたすら気高くあろうと常に自問するのみならず、それを追い求めて狂気のごとく真剣に行動する人間だったという事実を知るにすぎない。だからこそ、彼は広い読者層に深甚な感動と尽きせぬ共感をもたらす。佐藤賢一氏はアレクサンドル・デュマ『三銃士』のキャラクター設定に鑑み、その姿勢がまさしく、公私の隔たりから脱却した伝統の騎士道精神へ帰着し、廃れゆく「超克する人間（＝日常性／世界内存在を超える者、あるいは超えんと望む意志を保持する者）」の価値観が「歴史小説の主人公」に表現されていると明言した¹⁹⁾。そして、彼が経験した悲喜劇は疑いなく、遠藤周作『侍』にも通用する二重性（duality）のドラマトゥルギー、すなわち瞬間（momento）と永遠（eternidad）が反響し絡み合うパラレルワールドを構成するのだ。

したがって、12世紀、新プラトン主義の復興に沿って再認識された「瞬間的創造」に着目し、「どの相〔過去－現在－未来という重なり合う複数の時間〕においても、中央のキリストを創造主、救済者、そして支配者＝『強き王』として賛美し続けているのだとすれば、それは礼賛の『瞬間』でもあり、『永遠』なのかもしれない」と述べる金沢百枝氏の発言は的を射ている²⁰⁾。この場合、プロソポグラフィー〈人物記述の方法〉の心性史的枠組みを設定すれば（表1を参照）、瞬間（私＝小さな物語）と永遠（公＝大きな物語）は概ね鏡のようにお互いを見据える存在であり、その同時性によって補綴され書き留められるべきだろう²¹⁾。ユルスナールが正しく示唆するとおり、これが、ハドリアヌスの公私でもはっきり観察されることに、我々は気がつく必要がある。一本節では、ハドリアヌスの一篇の詩が精神的な脆さではなく、瞬間と永遠をともに体験して戦う姿、おそらく、弱さの裏返しの強さを覗かせる有様として逆説的に把握したい²²⁾。

表1 第Ⅱ節にみる、プロソポグラフィー〈人物記述の方法〉の心性史的枠組み²³⁾

① 私（狭義の私自身）→私（小さな物語）
② 公（広義の私自身）→私（大きな物語）
③ 公⇔私：私（小さな物語）のなかに公（大きな物語）の萌芽・原型を含む

表2 第Ⅲ節にみる、数学史のモジュラー形式から類推されるパラレルワールド²⁴⁾

+	連続性（≡断続・点線の連鎖）	$f(z) \rightarrow f \left(\frac{az+b}{cz+d} \right)$	分子の複合：遠心力
a	男		回転軸：接触・交流
b	子（息子）		分母の複合：求心力
c	女		（補説） 「三位一体・家族構造」の複合化を指摘する目的で、上下のパラレルワールドを仮定した。たとえば、ドイツ語では日の出と日没のように、上昇と落下（失墜）の方向感覚は乖離することなく、地平線（男性名詞ホリツォント）／水平線（女性名詞キム [ング]）を回転軸とし、そこに円環的な時空間、ひいては「時空連続体」が自ずから想起される ²⁵⁾ 。
d	子（娘）		
az	父		
cz	母		
az+b	父+息子（小さな父）→大きな父		
cz+d	母+娘（小さな母）→大きな母		
f	相対的な重みを有する女性形象		
z	母性に遷移する基底の要素		

Ⅲ. 征服者の娘と反復される「故郷喪失者」のイメージ

ガブリエル・ガルシア・マルケスは主著『百年の孤独』の結末において、次のように物語る。「……

アウレリャーノ・バビロニアが羊皮紙の解説を終えたその瞬間に、この鏡の、すなわち蜃気楼の町（マコンド）は風によってなぎ倒され、人間の記憶から消えてしまうことは明らかだったからだ。また百年の孤独を運命づけられた家系は二度と地上に出現する機会を持ちえぬため、そこに記されていることの一切は、過去と未来を問わず、永遠に反復の可能性はないことが予想されたからだった²⁶⁾。

ここで、マルケスは反復の可能性を、生きている人間の記憶と密接に結びつけ、存在と記憶の相関を強調する。ただし、そうした在り方がラテンアメリカ文学だけの風貌と判断することは妥当でない。ラテンアメリカの歴史的経験から、彼らはたえず、好敵手として旧世界の「スペイン人」を意識し、両者の避けられぬ対峙に即して、ラテンアメリカ文学に特有の「記憶の文体」が発生したからである。その際、お互いの相違（反作用）を了解した結果、相似（作用）についても記述できるという同時性を忘れてはならない²⁷⁾。

スペイン残留のボルジア家の一族からイエズス会総長（フランシスコ・ボルハ）を輩出した出来事にも相通じ、まことに皮肉な成り行きといえるが、ドイツの哲学者マルティン・ハイデッガー（1889-1976年）は「故郷喪失（ハイマート+ロース）」という概念を駆使し、とくに後期思想の原動力となった『ヒューマニズム書簡』（1947年）では、「存在の投げによって、人間は存在の開けた明るみのなかに住み、この存在の近さが故郷であるが、近代的人間は故郷喪失の運命のなかにある」との旨を述べた²⁸⁾。管見になるけれど、個としての人間模様が制限された可能性の現われであっても、それは決して無為な営みと形容されないはずだ。実際、古き故郷を喪失したその都度、癒されぬ寂寥感や形骸化への怖れを秘めながら、闇の果てに一条の光芒を見るがごとく、自らの想いを反芻し新しい血流を生もうとする姿が「人間の証明」とみなされるからである²⁹⁾。

マリア・ロストウォロフスキの著した、征服者ピサロの娘ドーニャ・フランシスカ・ピサロ（1534-1598年；以下、フランシスカとも略記）の伝記を特徴づけるのは、冷静な筆致で綴られたペルー植民地時代初期に関する歴史叙述である³⁰⁾。次に、同書を拠りどころとして、フランシスカの経歴を整理しよう。①フランシスカはインカの征服者である父親フランシスコ・ピサロ（1478?-1541年）のたつての希望で、3歳か4歳頃にインカ王女であった母親ドーニャ・イネス・ワイラス・ユバンキ（キスベ・シサ）から無理やり離別させられ、「スペイン人女性」として生きるように育てられた³¹⁾。②彼女は17歳にしてリマから追放され、スペインへ渡航したあげく、叔父エルナンド・ピサロ（1503-1578年）と初婚し、スペイン社会でずっと生きていくことを余儀なくされた³²⁾。③エルナンド・ピサロの死後、彼女は他の男と再婚したが、二度と故郷（ペルー）の地を踏むことはなかった。結局、彼女が自分を一個の旅人と規定していたことは、現存する史料『ドーニャ・フランシスカ・ピサロの遺言書』からも浮かび上がる³³⁾。

ロストウォロフスキによれば、フランシスカはエル・インカ・ガルシラソ・デ・ラ・ベガ（1539-1616年）と対比される。一両者ともペルーで産声を上げた混血（メスティーソ／メスティーサ）の代表であり、まさに激動の時代そのものを象徴しているが、エル・インカ・ガルシラソがアンデス世界に大きな影響を受けたのに対し、彼女はスペイン的な環境におい育ち、心してアンデス文化には目を向けなかったように看取される³⁴⁾。しかし、誰も彼女の奥底の真実を掌中にするにはできない。ある程度の確信をもっていえるのは、夢の現実化において、男（hidalgo）の運命が一層明瞭な遠心力に衝き動かされ、濁世に佇んで風に卷かれることも少なくなく、女（hidalgas）のほうは如何なる境涯に立っても求心力を維持し、揺らぎを超え安定した気分に乗って進むこと

である³⁵⁾。井上幸孝氏に従えば、植民地期の「先住民」は、スペイン勢力や混血者、その他の集団と別個に存在していたのではなく、彼らとの絶え間ない接触・交流があり、それらの相互関係の上に生きていた。そこを見落とすと、植民地の実状を無視する結果に陥ってしまう³⁶⁾。フランシスカは、メステイーサとしての自らが植民地期の〈母〉を演じることによって、無意識のうちにスペイン・アンデスの亀裂を埋める役割を果たしたのではないか。それは表層的な矛盾だが、ラテンアメリカにおける新しい母性を醸し出す兆しであったかもしれない³⁷⁾。

外的冒険と内的彷徨が纏れ合う、そうした男女のパラレルワールドは数学史のモジュラー形式から類推されるが(表2を参照)、人間精神にとって普遍的問題なるがゆえに、きわめて今日的な色彩を帯びるのだ。事例を挙げると、謎めいたフランツ・カフカ『変身』の終幕がはしなくも示すように、そこに登場する二人の兄妹の風姿は鋭い対照をなしている。「すると、(ザムザ) 夫妻は言葉すくなくなっていて、お互いのまなざしだけで暗黙の了解をとりかわしながら、ひとつ、これからは娘のためにりっぱな男を見つけたしてやらねばなるまい、と考えこんでいた。さて、いよいよ(郊外に向かう) 電車が行楽の目的地へ着いたとき、娘はいちばん先に立ちあがって、その若い肉体をしなやかに伸ばしたものだ。そのういういしい姿が、新しい夢と、善い意図をしっかり保証してくれるように夫妻には思われた……」³⁸⁾。

突然、一匹の毒虫に変身したグレゴール・ザムザは不幸なことに淋しく死んでいくが、主人公の交代によってどんでん返しが起こり、彼の妹である娘の幸福な後日譚、少なくともその予感という別のエピソードで一応の幕引きを迎える。この部分のカフカのキーワードは、象徴化された「電車 (tren)」であったろう。私見によれば、曖昧な姿かたちとはいえ、駅 (estación) に滞留し出発する「電車」はグレゴール・ザムザおよび彼の妹の両義的な性格を反映し、それと並行して、カフカのメタ的な思惟も指し示す。換言すると、この重ね合わせは、弁証法の「二項対立」につながる境界(駅路 ≡ 通過点)の論理といい³⁹⁾。かくして、カフカによる文学的昇華を契機とし、男女のパラレルワールドを連結する物語が見事に導かれるのだ。

最後になるが、フランシスカは子供たちを残したけれど、その後裔は歴史の流れのなかに消え去り、フランシスコ・ピサロを祖とする有力な家系は1756年、女系のルイサ・ピセンタ・ピサロ・イ・ソモサの死によって断絶した⁴⁰⁾。だが、フランシスカのイメージの痕跡は糸を引くがごとく、我々の記憶の要所要所で甦り、沸き起こり、かつ反復し、いままで繰り返されたように、それからもまた繰り返されていくことであろう。なぜなら、彼女の生涯の俯瞰図は、人間的な、あまりに人間的なもので素描され、我々と大差なく、個人の夢の終りが那邊にあるか、それが未だ不分明にしか見えてこないからである。

このように、本節は、ドーニャ・フランシスカ・ピサロのような人間の本質存在(エッセンティア)を歴史ロマンの美名で片付けず、ましてカーニバルの晴れがましい席で舞い踊る、仮面の異邦人(エトランジェ)の奔放さと類比しない。それどころか彼女は、普通の人間のありうべき道を追求したわけであり、変形の域を逸脱した、我々とまったく異質な人外境の存在ではない。事実上、歴史叙述の成長過程において、歴史学的「伝記」→伝記文学→歴史小説の虚構は人間のもつ制限された可能性に等しく、現実をことさら放棄したフィクションの暴走は構造的にも許されないのである⁴¹⁾。率直なところ、人間には「再話」への欲望が顕著だが、その現象すら、歴史小説と史実の連続性を裏書きしている。たとえ、直線的な様態を断ったとしても、それが点線である限り、双方の橋渡しには充分間に合うだろう⁴²⁾。

IV. おわりに—人間は何を失い続け、そして、何が残されるのか?—

これまで説明したとおり、本稿で扱ったローマ皇帝ハドリアヌス（第Ⅱ節）も、征服者ピサロの娘ドーニャ・フランシスカ・ピサロ（第Ⅲ節）も限界状況を生き抜いた旅人であり、たえず剣が峰を踏まえ、喪失感のうちに投げ下ろされつつも、上を見て漂うように道を歩んだ様子が鮮烈である。なるほど、彼らは我々にとって知られざる「スペイン人」—我々の人生にとって無縁な存在に他ならない。だが、「スペイン人」が人種的指標ではなく、アウトブリードの要素も点描される複雑な歴史空間として、大風景に現われた小さな点景人物の本質的意味を打ち出す恰好の「世界史」が展開したと認識するならば、この場合の「世界史」は渺茫たる人間精神の広がりには匹敵し、日本人にも身近いパターンに収斂されるだろう⁴³⁾。ことによると、瞬間の有限な円形の点（ステージメー）のなかに無限が含まれるという、「ゼノンのパラドックス」の哲学的解釈をも窺わせるのではないか⁴⁴⁾。

人間が公私において長い時間をかけ変化し、パラレルワールドを形成しながら終息に向かうとはいえ、弁証法的家族構造（dialectical family system）が根幹であることは不変である（表1と表2を参照）。したがって、どんな出自の人間でも、まるで粒子のように小さな物語「個人史」が転移し、それを胚胎にいつしか大きな物語が残される。その突破口を開く使命を担って、終りと始まりの両極に位置づけられるのが、「故郷喪失（ハイマート+ロース）」という概念であることを、本稿は推定する。スタンダールの言葉を借りれば、我々は幼年時代から様々なタイプの旅人の物語ないしロードムービーに魅了され、やがて大人になり、円な眼を輝かせて人並の歴史叙述を書こうと願ったとき、その懐かしい記憶が経験上ふつふつと内面に結晶化されていく。人間はあたかも交響楽を奏でるように、瞬間（私=小さな物語）を失い続け、そして、永遠（公=大きな物語）が残されることにより、広義の〈私自身〉への階梯がやおら築かれる—とりあえず、これを本稿の結論としておきたい。

付言ながら、こうした見方は「スペイン人」にとどまらず、シュテファン・ツヴァイク『マリー・アントワネット』他の伝記文学を味読する際に応用可能と考えられ、同じくハプスブルク家出身だった、「幻影」のメキシコ帝国の皇帝マクシミリアン（1832-1867年；在位1864-1867年）に関する歴史的「伝記」を用意し、彼の心情に食い入った沈痛な雰囲気や叙述するためにも有効である⁴⁵⁾。

*本稿は、『京都ラテンアメリカ研究所紀要』No.8（2008）、23-38頁に発表した論文、古畑正富「オクタビオ・パスの作品に見るメキシコ民衆の心性—『孤独の迷宮』をめぐる問題を踏まえて—」の補遺とすべく構想された。本稿の作成にあたり、いくつかの文学作品を「参考文献」に記載していないが、それらは本稿で引用に相当する箇所を採らなかったものである。

注

- 1) 村上 1988, 234-235頁。パラレルワールドと人間の認識能力を扱った広義のハードSFとして、小松左京『果しなき流れの果に』『継ぐのは誰か?』に繰り広げられた命題と、それに伴う作者

の感慨はいまでも新鮮である。

- 2) ボラーニョ 2009。とりわけ、この短篇集に収録された『エンリケ・マルティン』(同書 39-57 頁)は、自裁という決定的瞬間に至るまで、バルセロナで稚拙な作品をしぶとく産み続けたとおぼしき〈永遠の三流〉詩人とその密かな心の痛みを活写し、我々の胸をひしひしと打つ(同書 247 頁「訳者あとがき」を参照)。
- 3) 岡本 2009, 7-8 頁。ここでは、マルクス主義史学や大塚史学などが射程に含んでいた「大きな物語」への回帰の可能性を指摘する。「止揚(アウフヘーブング)」に関しては、アヴィネリ 1984 を参照。
- 4) 片倉 2001, 167 頁。
- 5) 辻 2008, 43-44 頁。
- 6) 背景情報として、飯田 2009 所収の論考が役立つ。ジャック・ル・ゴフによれば、心性(マンタリテ)という概念の曖昧さこそが心性の歴史が生まれる大本のところにあり、また心性という概念が曖昧であるからこそ、心性の歴史は高い生産性を示すとされる。コルバン 1992, 548 頁。
- 7) これは、彼女の歴史小説の白眉と評価されてきた。ユルスナールに関しては、塩野 2000, 208-216 頁, 317-318 頁以下が簡潔に、彼女の構想と作品世界を論評している(181-361 頁「皇帝ハドリアヌス」を参照)。
- 8) このような歴史理論の仕方(ミクロストリア)に関しては、ギンズブルグ 2009, 164-205 頁, 250 - 262 頁の議論が重要である。英雄伝の事例とその枠組みに関しては、Jason 1981 から知見を得た。
- 9) 「ハドリアヌスの生涯」の翻訳は、スパルティアヌス 2004, 3-83 頁を参照。
- 10) ユルスナール 2008, 314-338 頁「作者による覚え書き」。
- 11) ユルスナール 2008, エピグラフや 312 頁他を参照。スパルティアヌス 2004, 79-80 頁では、「さまざま愛すべき小さな魂よ。汝は肉体の客人、仲間であった。今、その汝が蒼白く硬く装いもない、あの場所へ消え失せてしまうのか。いつもの戯れを言うこともせず」という、より逐語的な翻訳が施されている。
- 12) 安井 2009, 58 頁。
- 13) スパルティアヌス 2004, 46 頁。
- 14) 南川 1998, 172 頁(121-173 頁「賢帝か暴君か—ハドリアヌスのローマ帝国」を参照)。
- 15) スパルティアヌス 2004, 4 頁。南川 1998, 138 頁。
- 16) 司馬 1988b, 57-69 頁。
- 17) 司馬 1988b, 142-143 頁。
- 18) 本稿では、セルバンテス 2001 を随時参考にした。わけても突撃した対象の風車が単一でなく、眼前にずらりと居並んでいたことは面白い。
- 19) 佐藤 2002, 194-200 頁。ひたひたと自分を取り巻く、日常性/世界内存在に関しては、ハイデッガー 1994 を参照。この問題に付随して、遠藤、辻 1974, 178 頁以下もわかりやすく言及する。
- 20) 金沢 2008, 197 頁(コメント:村上 2009, 105-106 頁)。ここでは、スペイン北東部カタルーニャ地方におけるロマネスク様式的美術として、ジローナ司教座教会の《天地創造の刺繍布》が狙上へのせられる。支配者=『強き王』という賛美に関しては、古代オリエントの王碑文に記述される称号(シャル・ダンヌ)を参照。Cohen 1979, pp. 38-39.
- 21) 辻邦生『春の戴冠』のうちに織りなされた、〈神的なもの〉に関するサンドロ・ボッティチェリとマルシリオ・フィチーノの思想は、瞬間と永遠の同時性とその断ちがたい絆を吟味するための指針が見出される。そして、ローマ皇帝トラヤヌス(在位 98-117 年)の治世下、キリキアのタルソスを舞台とした、トルストイ『光あるうち光の中を歩め』(原久一郎訳/原卓也解説, 新潮文庫)の大団円にみる劇的な回心の場面にも留意しなければならない。

- 22) ユルスナール 2008 のストーリーは、次のようなプロットで構成されている：「さまよえる いとおしき魂」, 「多様 多種 多形」, 「ゆるぎなき大地」, 「黄金時代」, 「厳しい修練」, 「忍耐」。
- 23) プロソポグラフィの原理に関しては、南川 1998, 84-87 頁を参照。
- 24) モジュラー形式に関しては、アクゼル 2003, *passim*. 同書 192-194 頁によると、「ガロア理論」を使うことで、大きな無限集合の問題から小さな有限集合で表現される問題へ移ることができる。この数学史の現象は、有限（瞬間）のなかに無限（永遠）を宿す、ある意味で仏教の『華嚴経』と一脈通ずる宗教的概念を連想させよう。もっとも本稿は具体的に可視化するため、家族という世間 ⇄ 社会の基本単位をクローズアップした。関連認識として、本村 2005 を参照。
- 25) ギリシア神話がそうであるように、上昇と落下（失墜）を双方向として同時把握する物語は多い。（牡牛を殺す）ミトラス教の図像において、カウテスとカウトパテスと呼ばれるフリュギア帽をかぶった二柱の神も、上向きの松明と下向きの松明を持っているが、これらは太陽神の日の出と日没の姿を表すと考えられる。小川 2003, 118-119 頁。ミトラス教の研究動向に関しては、小川 1993 から多大の裨益を受けた。その点、本村凌二氏が引用する、3 世紀の新プラトン主義者プロティノスによる臨終の言葉は興味深い。「今、私は、われわれの内にある神的なものを、万有の内なる神的なもの元へと上昇させるように努めているのだ」。本村 2007, 331 頁。後代の文学作品に属するが、類似した論理の筋道は、ジョン・ミルトン『失楽園 (*Paradise Lost*)』、あるいはウィリアム・ゴールディングの寓意的作品『自由な転落 (*Free Fall*)』（小川和夫訳、中央公論社）でも垣間見える（創世記 28 章 10-12 節；コヘレトの言葉 3 章 21 節他を参照）。
- 26) マルケス 1972, 307 頁。定冠詞の付かない *soledad* は、孤独の無名性に深く関係するものと予想され、それを通し、ラテンアメリカの民衆の運命が自然に透けて見える。鼓直氏によれば、〈母〉であるウルスラが物語の途中でわが子らの上に思いをはせて、しみじみ慨嘆しているとおり、個人運命を中心に考えた場合のこの小説の主題は愛の欠如、孤独である（同書 311 頁以下を参照）。
- 27) 「記憶の文体」を示すイデオロギー的史料として、古代オリエント、なかんずく、アッシリアの「記念碑文 (*memorial inscription*)」は見逃せない。そこには、記憶の偽装という問題がつきまとうものの、アッシリア王の画期となった諸事件が要約され、人生の縮図のごとく展示されたことは明らかである。Tadmor 1981 他。
- 28) 「故郷喪失の運命」に関しては、ハイデッカー 1997, 75-85 頁を参照。ハイデッカーの後期思想は難解だが、渡邊二郎氏の解説が要領を得ており、本稿でもそれを糸口に検討を進める（「存在の思索の意義」について論じた、同書 372-396 頁を参照）。また、この種の風韻は、司馬 1976 から臆に感じられる。末尾の文脈（同書 511 頁）によると、主人公である重蔵の私的世界が、「自然（ピュシス）という開けた公的世界の場に移植され、彼の心も峠の風霜によって彫琢されはじめている。
- 29) 森村誠一『人間の証明』を参照。同様に、アメリカ・モダンホラーの先駆的作品として知られる、ウィリアム・ピーター・ブラッティ『エクソシスト』（宇野利泰訳、創元推理文庫）のクライマックスも煽々たる余韻を残す。迫害の心性、エクソシズムを含む多様な論点に関しては、松本 1994 の分析が刺激的である。しかし、「エクソシスト（アッカド語：アーシブ）」それ自体は、古代オリエントから馴染みの深いモチーフであり、時代的・地理的に必ずしもキリスト教世界にとどまらない広がりを持つ。Ritter 1965.
- 30) すでにドーニャ・フランシスカ・ピサロを題材とした、マリオ・バルガス・リョサの息子、アルバロ・バルガス・リョサの歴史小説（2003）『ピサロの混血の娘—二つの世界を跨ぐプリンセス (*La mestiza de Pizarro, una princesa entre dos mundos*)』が公刊されており、今後の変化とさらなる発展が期待されよう。ロストウォロフスキ 2008, 221 頁。
- 31) ロストウォロフスキ 2008, 19-55 頁。

- 32) ロストウォロフスキ 2008, 56-92 頁。増田 2002, 216-218 頁。
- 33) ロストウォロフスキ 2008, 93-101 頁。『ドーナ・フランシスカ・ピサロの遺言書』（同書 131 頁）の冒頭には、「……同じく、もしもわれらが主である神の思し召しにより、私がいまその準備を整え、これから出かける予定の長の〈旅路〉で天に召されることになれば、……」という言葉が発見される。寄せては返す望郷の想いに関しては、井上靖『天平の薨』に加え、池田 2008 に紡がれた留学生たちの事跡も我々に貴重なアナロジーを提供する。
- 34) ロストウォロフスキ 2008, 105-107 頁。
- 35) 屈折を隠したエル・インカ・ガルシラソの自意識 (ego) は、ロストウォロフスキ 2008, 3 頁に例示されている。なお、本稿では、男女の位相を逆像として捉える、辻邦生『夏の砦』、その他の作品も事前に吟味した。これらは生活世界から徒に遊離せず、むしろ新しい角度から眺めた洞察を提示するからである。
- 36) 井上 2009, 14 頁。
- 37) ロストウォロフスキ 2008, 119-123 頁。もはや古典的研究の範疇に入るが、新しい母性の表象を探究する端緒として、バダンテール 1998 を等閑に付すことはできない。
- 38) カフカ 1968, 94-95 頁。
- 39) カフカのメタ的な思惟と比較するため、確かに彼の源流となった、起源／反復という旧約聖書の歴史観、すなわち出発点 (*terminus a quo*) ⇔ 終了点 (*terminus ad quem*) の複合図式が問い直されなければならない。池田 1982 ; Halpern 1996。最近では、市川 2009 がそれをめぐる思想的問題をまとめている。境界（駅路 ≡ 通過点）の論理への本格アプローチは今後の課題だが、その前提として、赤坂憲雄 2002 だけでなく、ブラウン 2002 の意見も研究史のうえて意義深い。ブラウン 2002 を嚆矢とする「古代末期世界（おおよそ紀元 200-700 年）」の定義について、長谷川 2009, 224 頁は「古典古代が長い時間をかけ変化しながら終息に向かう時代とし、単なる衰退期とも古典古代と中世の中間期とも捉えられない、多様性に富んだ世界（筆者補足：広域の政治文化圏・潮流）」と記す。この脈絡における「中間期」は歴史用語であり、しばしば乱れを孕み混乱した「過渡期」を意味するが、本稿はそれと一線を画し、より積極的に、新しい人間 (*hombre nuevo*) が生まれる豊饒な「胎動期」と力説したい。さらに、Ammianus 1986 で載然と描き分けられる、後期ローマ帝国の帳を足速に潜った皇帝たちのシルエットも考慮すべきだろう。
- 40) ロストウォロフスキ 2008, 102-104 頁。
- 41) 歴史的「伝記」のモデルに関しては、ル・ゴフ 2001 を参照。このように、「記憶の生産」という側面を重視することで、そこに象嵌された表象の意味を確認し、拡大された歴史上の人物の実像に迫ることが可能である。それゆえ評伝の系譜では、クロニカが内在させるバイアスも再検証しながら、歴史的「伝記」→ 伝記文学を基礎に巧妙な虚構を設定し、歴史小説の成立を目指さなければならない。事実、こうした言説構造が機縁となって、歴史小説に架空の人物を登場させる試みも破綻なく行なわれる。これは、史実から切り捨てられた無名の、あるいは市井の人々について当てはまる。井上靖『敦煌』他を参照。
- 42) 「歴史化／再・歴史化」と命名される歴史的イメージの反復性（周期的な複数性）に関しては、網野 2008 の解釈が平明である。
- 43) この作劇法は『燃えよ剣』『播磨灘物語』など、司馬遼太郎氏の歴史小説に繰り返し使用されるが、日本人とバスク人の擦れ違う運命を見つめた短編『奇妙な剣客』ではその手腕が遺憾なく発揮されている。バスク人に関しては、司馬 1988a が詳しい。
- 44) この問題に関して、野崎 1980, 79-124 頁「無限についての逆説」を参照。
- 45) マクシミリアンの歴史的「伝記」に関しては、クラウセ 2004, 271-301 頁「世界で最も美しい帝国」がコンパクトであり、その内容も充実している。

参考文献

アヴィネリ, シュロモ

1984 『終末論と弁証法—マルクスの社会・政治思想』(叢書・ユニベルシタス, 中村恒矩訳), 法政大学出版社。

赤坂憲雄

2002 『境界の発生』, 講談社学術文庫。

アクゼル, アミール・D

2003 『天才数学者たちが挑んだ最大の難問—フェルマーの最終定理が解けるまで (*Fermat's Last Theorem: Unlocking the Secret of an Ancient Mathematical Problem*)』(吉永良正訳), ハヤカワ文庫。

網野徹哉

2008 「インカへの欲望—植民地主義と表象の歴史的連関をめぐって」, 関雄二・染田秀藤編『他者の帝国—インカはいかにして「帝国」となったか』, 世界思想社, 249-273 頁。

飯田隆他編

2009 『歴史／物語の哲学』(岩波講座 哲学 11), 岩波書店。

池田裕

1982 『旧約聖書の世界』(人間の世界歴史 1), 三省堂。

2008 「故郷の月」, 『聖書と自然と日本の心』, ミルトス, 194-203 頁。

市川裕

2009 『ユダヤ教の歴史』(宗教の世界史 7), 山川出版社。

井上幸孝

2009 「書評：網野徹哉『インカとスペイン 帝国の交錯』(興亡の世界史 12, 講談社, 2008 年)」, 『日本イスタニヤ学会会報』 14, 13-14 頁。

遠藤周作, 辻邦生

1974 「歴史と現代文学—なぜ歴史小説を書くか—」, 『灰色の石に座りて—辻邦生対談集』, 中央公論社, 155-192 頁。

岡本充弘

2009 「歴史理論—回顧と展望—」, 『史学雑誌』 118-5, 6-10 頁。

小川英雄

1993 『ミトラス教研究』, リトン。

2003 『ローマ帝国の神々—光はオリエントより』, 中公新書。

古畑正富

片倉充造

2001 「書評：マリオ・バルガス＝リョサ『若い小説家に宛てた手紙』（木村榮一訳 新潮社 2000年）」、『京都ラテンアメリカ研究所紀要』No.1, 165-167頁。

金沢百枝

2008 『ロマネスクの宇宙—ジローナの《天地創造の刺繍布》を読む』, 東京大学出版会。

カフカ, フランツ

1968 『変身』（中井正文訳）, 角川文庫（改版）。

ギンズブルグ, カルロ

2009 『糸と痕跡』（上村忠男訳）, みすず書房。

クラウセ, エンリケ

2004 『メキシコの百年 1810-1910—権力者の列伝』（大垣貴志郎訳）, 現代企画室。

コルバン, アラン

1992 『浜辺の誕生—海と人間の系譜学』（福井和美訳）, 藤原書店。

佐藤賢一

2002 『ダルタニヤンの生涯—史実の「三銃士」—』, 岩波新書。

塩野七生

2000 『賢帝の世紀』（ローマ人の物語Ⅸ）, 新潮社。

司馬遼太郎

1976 『梟の城』, 新潮文庫（改版）。

1988a 『南蛮のみちⅠ』（街道をゆく22）, 朝日文庫。

1988b 『南蛮のみちⅡ』（街道をゆく23）, 朝日文庫。

スパルティアヌス, アエリウス他

2004 『ローマ皇帝群像Ⅰ』（西洋古典叢書, 南川高志訳）, 京都大学学術出版会。

セルバンテス, ミゲル・デ

2001 『ドン・キホーテ 前篇 (*El ingenioso hidalgo Don Quijote de La Mancha*) / 後篇 (*Segunda parte del ingenioso caballero Don Quijote de La Mancha*)』 (牛島信明訳), 岩波文庫 (全6冊)。

辻佐保子

2008 『「たえず書く人」辻邦生と暮らして』, 中央公論新社。

野崎昭弘

1980 『逆説論理学』, 中公新書。

ハイデッガー, マルティン

1994 『存在と時間』(細谷貞雄訳), ちくま学芸文庫。

1997 『「ヒューマニズム」について—パリのジャン・ポーフレに宛てた書簡』(渡邊二郎訳), ちくま学芸文庫。

長谷川宜之

2009 『ローマ帝国とアウグスティヌス—古代末期北アフリカ社会の司教』, 東北大学出版会。

バダンテール, エリザベート

1998 『母性という神話』(鈴木晶訳), ちくま学芸文庫。

ブラウン, ピーター

2002 『古代末期の世界—ローマ帝国はなぜキリスト教化したか?』(宮島直機訳), 刀水書房。

ボラーニョ, ロベルト

2009 『通話 (*Llamadas telefónicas*)』(エクス・リプリス, 松本健二訳), 白水社。

増田義郎

2002 『アステカとインカ—黄金帝国の滅亡』, 小学館。

松本宣郎

1994 『ガリラヤからローマへ—地中海世界をかえたキリスト教徒』, 山川出版社。

マルケス, ガブリエル・ガルシア

1972 『百年の孤独 (*Cien años de soledad*)』(新潮・現代世界の文学, 鼓直訳), 新潮社。

南川高志

1998 『ローマ五賢帝—「輝ける世紀」の虚像と実像』, 講談社現代新書。

村上司樹

2009 「書評: 金沢百枝『ロマネスクの宇宙—ジローナの《天地創造の刺繍布》を読む』(東京大学出版会, 2008年)」, 『史学雑誌』118-6, 102-111頁。

村上春樹

1988 『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド (下)』, 新潮文庫。

本村凌二

2005 『多神教と一神教—古代地中海世界の宗教ドラマ』, 岩波新書。

2007 『地中海世界とローマ帝国』(興亡の世界史 04), 講談社。

安井萌

2009 「古代ローマの『名乗りの条件』の相続について—その歴史的展開の様相—」, 『史学雑誌』118-8, 37-62頁。

ユルスナール, マルグリット

2008 『ハドリアヌス帝の回想 (新装版)』 (多田智満子訳), 白水社。

ル・ゴフ, ジャック

2001 『聖王ルイ』 (岡崎敦・森本英夫・堀田郷弘訳), 新評論。

ロストウォロフスキ (デ・ディエス・カンセコ), マリア

2008 『征服者ピサロの娘ドーニャ・フランシスカ・ピサロの生涯 (Doña Francisca Pizarro: una ilustre mestiza) 1534-1598』 (染田秀藤監訳), 世界思想社。

Ammianus Marcellinus

1986 *The Later Roman Empire (AD 354-378)*, tr. by Walter Hamilton, Penguin Books, London.

Cohen, C.

1979 “Neo-Assyrian Elements in the First Speech of the Biblical Rab-Šāqē”, *Israel Oriental Studies* 9, pp. 32-48.

Halpern, B.

1996 *The First Historians: The Hebrew Bible and History*, Pennsylvania State University Press, Pennsylvania.

Jason, H.

1981 “Ilja of Murom and Tzar Kalin: A Proposal for a Model for the Narrative Structure of an Epic Struggle”, *Slavica Hierosolymitana : Slavic Studies of the Hebrew University*, L. Fleishman, O. Ronen, and D. Segal (eds.), Magnes Press, Jerusalem, pp. 47-55.

Ritter, E.K.

1965 “Magical-expert (=āšīpu) and Physician (=asû): Notes on Two Complementary Professions in Babylonian Medicine”, *Assyriological Studies* 16, pp. 299-321.

Tadmor, H.

1981 “History and Ideology in the Assyrian Royal Inscriptions”, *Assyrian Royal Inscriptions : New Horizons in Literary, Ideological, and Historical Analysis*, F.M. Fales (ed.), Istituto per l'oriente, centro per le antichità e la storia dell'arte del vicino oriente, Roma, pp. 13-33.